渥

自選初期作品集

白川渥

崖

白川渥

自選初期作品集

創樹社

崖——自選初期作品集

1977年6月15日第1刷発行

著　者　白川　渥

発行所　株式会社 創樹社
東京都文京区湯島2・2・1　〒113　電話 東京(815)3331～2
振替東京2・154580
本文印刷　望月印刷所
装本印刷　広　　陵
装　画　　小磯良平　造本　道吉　剛

1977 © Atsushi　Shirakawa

目次

崖 5
村梅記 47
柊の庭 101
天人 129
良寛唱 173
落雪 199
後書 219

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

崖

白川渥

——自選初期作品集

装画＝小磯良平

崖

一

銅鑼が鳴渡つた時、折よく雨脚が止んでゐた。濡れた船と岸壁との間を、幾すぢものテープがにぎやかに游いだ。姉は母とみねと計蔵の三人分を、デッキの上で手綱のやうに控へながら、片方の手で大きくまん円くハンカチを振つた。みねの持つた青色のテープが先に断(き)れた。それが母と計蔵の二条にからまりながらぴらぴらと凧の尾のやうに雨後の風にあふれた。

「ちよいと、一緒に持つておくれよ」

母はみねに加勢を頼んだ。が、みねの指が母のテープにふれた時、今度はデッキの姉の手元で断れた。そして計蔵の分だけが、折からの潮風に少したわみながらぐんぐん伸びていつた。ベレ帽の下から姉の腕白な眼玉がよく見えた。

「あれ、断れてよ、断れてよ」

みねが背伸びして見守つた。

訣(わか)れといふよりも、何かそれで興じてゐるといつた幼い光景が、しばらく姉と弟との間でつづいた。が、他眼にはさうであつても、計蔵はその一条(すぢ)に家の後事を托して、「しつかり、しつかり」としつこく念を押してゐる姉の気持が少し五月蠅(うるさ)く感じられた。

テープが九分通りまで伸びて断れた時、母はもう姉のブラウスを見失つてゐた。そんな有様がわかつたか、向うで姉の遠い顔が少し歪んで見えた。

船は完全に出港の方向を取つてから、もう一度汽笛を雨後の空へ噴き上げた。

「姉さんは見えなくなるまで笑つとつた」

計蔵は帰りに母に言つた。

彼等は夕暮のやうに暗い税関前のビル街を元町の方へ抜けた。雨はすつかり止つてゐたが、みねは傘をさし掛けて、おそい母の脚をかばつてゐた。母は涙をためてゐた。

計蔵は又かと、一寸いやな気がした。兄が戦死してから、母は別人のやうに変つてみえた。その痛手をいくらか誇張して計蔵の心に重つたるく凭れかかつて来るのだつた。その当座、母は人前ではさすがに生来の気丈な構へを崩さなかつたが、計蔵にだけはしつこいほどしよげてみせた。何か、彼の孝心といふものを更めて敲いてみようとするやうな露骨さがあつた。

——お前は兄さんほどに孝行が出来るかい？

母の涙が、そんな請求がましい意味に計蔵には受取れるのだ。

母は七十三である。もう高下駄で出歩く年ではないが、これまで一度も姉の見送りを欠かしたことがないと言ひ張つて出て来ただけに、それでもみねの歩くほどづつ運んでゐた。三人は元居留地の静かなホテル裏で須磨行きのバスを待つた。計蔵は二人を送つておいて、午後からの授業に出かけるつもりでゐたが、母はそれを案じて、もういいもういいとせき立てた。おしやべりの姉が帰つてしまふと、母は俄かにみすぼらしく考へ込んで見えるのだつた。

「お母さんが泣いてゐなさつたナ、ゆふべあれほど流しといて。私はもう泣きじまひになさるかと思ふとつた」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あれはお芝居のせゐです。今日のはちがふちがふ」

母は乾いた瞼を、ちよいと娘のやうな科で袂で擦つた。

彼等は昨日四人連れで楠公前のK座に行つた。芝居は事変下の家庭もので、母は主人公が出征するあたりから、もう泣いてゐた。計蔵ははじめ、隣りの桝に気兼ねしてゐたが、だんだん一家の場合と似通つた条の運びに、さすがに涙が出た。それが、姉やみねの瞼にもきらきらと溜つてゐた。舞台が哀しいのでない。あの当時、泣けなかつた。いや泣かなかつたものが、泣けずにじつと蔵つておいたものが、無性にあふれて来るのだつた。四人は四人なりに、生前の兄を舞台の上にはつきり浮べて、それに向つて、これまで胸の襞に圧しかくしてゐたものを、更めてじりじりと滴してゐるのだつた。それは骨肉への負債をそれだけづつ果してゆくやうな、何かほろ甘い陶酔の気持でもあつた。そしてそんな負債を誰よりも一ばん多く背負つてゐるかに、母はしまひには老人らしくもない嗚咽をさへ洩らした。誰にだつて心の内壁に秘めてゐるいくばくかの涙があらう。そして、それがすつかり排泄されてゆくさばさばしい生理といつたものが、却て涙の後顔を生き生きとさせるのだ。計蔵は幕になつて寿司を頬張つた時、自分の頬にも、又母達の面にも、何か似つかはしくもない精彩を感じた。それは泣いて、やつとこれで心の損害を取戻せたといつた表情であらうか。

帰宅してから姉は計蔵に皮肉を言つた。

「男子がぽろぽろさせるなんてみつともないものね」

「いいや、僕のはあんた方にお附合ひしただけだ」

彼は照れてさう言ひ返したが、いはばこのお芝居のおかげで、彼はいくらか姉の信用を得て今日の見送りが出来たのである。

——授業の時間までもう幾らもなかつた。計蔵は街樹の疣を洋傘の先が突衝いて、ぱらぱらとみね達の

傘に露を落した。どのバスも、もう一つ向うの十字路で満員になつた。彼は母をタクシイで送りたい気もしたが、三つ目のバスにどうにか無理に二人を押し込ませた。そして一たん十字路で山手行きの電車をまつたが、ふと彼はそこに駐(とま)つてゐるタクシイに手をあげた。乗つてから、高下駄であやふくみねに摑まつてゐたバスの中の母の姿が泛んだ。歩けばよかつたと思つた。もう姉の負託に叛いてゐるわがままな自分に、彼はクッションの中で一寸眼をつむつた。

二

母は姉の聟選びを小十年もつづけて、たうとう三十近くになつてから現在の貿易商の後家に嫁(かた)づけた。そして兄の場合には、むしろそれ以上に吟味に吟味を加へてからみねを貰つた。母は嫁の気立や器量について、当の兄以上に喧しい条件をつけた。みねの実家は神戸の旅館だつたが、母はその頃大阪に店を持つてゐた姉を連れて、わざわざみねの家にこつそり泊りに行つて調べ上げたものである。

「今度は計蔵の番ぢや。もうあんたのは自分でお探し」

いよいよみねを迎へた時、母はさすがに半生の道楽に堪能してか、計蔵にこんな冗談を言つた。それは家を継ぐ嫂だけはどうでも、一度みづから吟味する必要があるが、あとはもうコリゴリだ、まア当今流行(はやり)の自由結婚位は十分認めるといつた調子だつた。が、兄が測量班の工兵将校として思ひもかけぬ奥地で戦死すると、母は又ぞろ計蔵の妻帯について真剣になりだした。母の参謀格はやはり姉だつた。頑丈な肩口や才走つた大きな二皮眼が母そつくりで、大連に店を移してからも、姉は春秋一度づつは商用にかまけて、母のもとで暫く暮した。今度、嫂のみねを、そのまま計蔵の妻に直らせたのも、母は幾度も姉を飛行機で招びよせ、殆ど一季に亙(わた)る合策の結果なのである。

計蔵はその話を、今年のはじめ、東京の任地ではじめて姉から手紙で打明けられた。尤も、その前、兄

の一周忌で親戚の者が須磨の家に集つた時、誰かがちょいとそんなことを口に出した。が、それは久しく見なかつた計蔵の成人ぶりに、ふと浮んだその場の思ひ附きで、格別意見といふほどのものではない。が、計蔵は姉からの手紙で、実はこの着想が、ずつと前から姉と母との間で秘められてゐたのだといふことを知つた。みねさんにはまだ何事も秘してあります、然しあなたさへ承知なら嫂さんのお気持の方は私がお引受けします、と姉はむすんであつた。それは計蔵の気持に対しても、若干の自信のありさうな書振りであつた。

が、本来みねには誰よりも母が惚れてゐるのである。みねが来て三年、母はその間に一度も気まづい思ひはしなかつたと、暗に自分の選んだ眼識を誇つてゐた。そんな義理であつてみれば、みねとても世間風に、実家に帰つて再縁をまつといふわけにはゆかない。のみならず、みねはともかく武人の妻である。——わたしは追放されるまで、お義母さんのお側を離れません。——彼女はさう言つて、これまでずつと須磨の家の仏壇をお守りして来たのだつた。

計蔵は姉の手紙をみた時、それが全く予想だにしなかつた話であつたが、即座に、これはもうどうでもさうなるものに違ひない、と心を決める他はなかつた。

彼が初めてみねに会つたのは、彼女が嫁いで来る前年の冬休みで、もの好きから彼は一度母に連れられてそれとなくみねの家に泊りに行つた。兄がそんな覗き見は嫌だと言ふので、いはば兄の代りに見に行つたのである。宿は諏訪山下の高台で、南向きの廊下の籐椅子から神戸港が一目に見えた。が、母は遠い眼でずつとそこから庭樹の梢越しに階下の帳場に気を配つてゐた。暗くなつて、

「お嬢さんは？」

と、母は係りの女中に訊いた。

「踊りのお稽古にお出でです」

「おや！　一体いつからお習ひでした？」
「もうせんからでした。帰りやはつたらお招びしませうか」
「いいえ、何んにも……」
が、瞬間、女は素早く計蔵の顔をみて、少し狼狽へて部屋を出た。
あとで母は、
「ねえ、気附かれたよ、お前。さつぱりです。もうふだんのままぢや見られやしない」
と、くやしがつた。
「ひよつとしたら、僕達みたやうなお客が他にも来るのかも知れない。お母さん、早く決めないとどこかの鳶に攫はれますぞ」
と、計蔵はまだ当人を見もしないで、母を煽ると、
「さうだとも」
と、母はいくらか狼狽へて言つた。
その晩、計蔵は、明らかに彼の視線に躓いてゐるみねと、二三度廊下ですれちがつた。母が言ふほど綺麗ではなかつた。が、美事に均整のとれた軀や大柄な顔附きが、どこか日本人放れした印象を与へた。この女に舞踊をやらせてゐる両親の気持が彼には少しわかる気がして、ふと振返ると、女の背姿にはもうそんな線がいくらか身について流れてゐた。
「いい女だ。僕はあんな嫂さんが好きです」
覗いた後で、計蔵は妙に羞かんで母に言つた。
が、計蔵が本当に母の慧眼に承服したのは、結婚後、兄達がしばらく滞京した頃のことだ。彼はこの時、兄達と身近に暮しながらみねの瑞々しい新妻ぶりをむしろ羨望の気持で見やつた。どちらかといへば気む

づかしやの母や兄であるが、みねが一枚加はつたために、家中の隅々まで眩しかつた。家業で鍛へた愛嬌を、彼女はそのまま母と良人のために用立ててゐるのである。

父の夭逝後、母の手一つで育てられた計蔵には、家の中のそんな明るさが哀しいほど身に沁みた。母にしても、このやうな日を夢みての粒々の半生であつたかと、計蔵はこの時、嫂を迎へた感想を詳しく大連の姉にも書送つたものである。

が、この度の姉の便りといふのは、恐らくそんな度すぎた彼の讃嘆を、そのままちやんと胸に覚えてゐて、その上での慫慂であらうか。

あのひとは今もやはり好意の持てる方です。しかし、それは嫂さんとしてであつて、それ以外の気持ではありません。私はお手紙に接して一方ならず面喰つて居ります。が、仰せの通り嫂さんと一緒になることが、母上のお望みでもあり、又兄さんの御遺志にも添ふとのことであれば、これはもう万事お委せする他はありますまい。

ただ有体に言へば、現在の私は姉さんが御推定なさるほど無垢な青年ではありません。花聟といふ資格では、或はあのひとよりももつと欠けてゐるかもしれません。これは長らく家を離れて暮してゐた私には、殆ど避け難い過去でした。だから私としては家のためだとは申すものの、何かそれ故に犠牲になるといつた条のものでは毛頭ありません。ただこの上は、あ人の率直な気持を十分尊重して頂きたいと思ひます。

計蔵はこれを姉からの二通目の便りが来て出した。その間幾度も返事を認めながら、いざとなるとポストの前を素通りした。一旦心を決めてはみるもののやはり異例な結婚であるだけに、心の底では逡巡はれ

るのだつた。が、これを出してしまふと、すべてが決つたやうな、その決つた音が遠くでしたやうな、妙に浮き浮きした気持になつた。のみならず、彼は一夜にして、もうみねを嫂の位置から恋人といつた位置にまで引下ろしてゐた。——

みねは生来の悪筆だつた。話が決つてからも彼女は時折母の代筆で家事向きの便りを寄来したが、うはべはやはりまだつつましく嫂といふ位置からのものを言つてゐるものの、さすがに一段と固ばつてゐる筆蹟に、彼は一字一字心をときめかした。そしてそんなみねの本心をあばきたい気持もあつて、彼の方ではややもすれば書きすぎるやうな返事になるのだが、ふと又それが何か兄への不逞な気持のやうにも省みられて、ある時は、彼は却て必要以上に冷い事務にもした。

万事は姉一つの方針で取決められた。みねは一旦除籍されて、それから更めて計蔵の妻として入籍する手筈であつた。その話が、すでに兄の一周忌の時から、姉がそれとなくみねの実家にも通じてあつたと、よほど後になつてから彼は知つた。

計蔵は兄が工兵少尉に任官して三年目に、ある教員養成の学校を出た。それから兄弟はずつと別々の任地で暮すやうになつた。はじめて計蔵が北海道のある中学に赴任した時、兄は熊本の隊にゐた。その後、二人の任地は少しづつ近づくかに見えて、又不意に意地悪く離れたりした。兄の場合には天下りの官命でやむを得なかつたが、計蔵の方ではあながち転々とする必要もないのであつた。が、彼は自ら何らかの口実を作つては殆ど兄ほどに任地を変つた。姉は二人を揚合せたら丁度私が出来るとよく自慢したが、彼等二人の性格はそれほど対蹠的だつた。それが成長するにつれてますますはつきりとした。そして二人の選んだ職業が略〻相似たものであるだけに、計蔵の方は忽ち悲鳴を上げた。もし彼に兄ほどの謹厳さがあつたら、事実転々たる、左様、殆ど放浪的な勤務状態もなかつたであらう。

母は兄の任官後は、ずつと兄のそばに附いてゐたが、一度でもいい、兄弟が一緒の家に居られたら、と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com